

# 高等学校におけるボランティア教育についての研究

高校教育研修課

## はじめに

このたびの阪神・淡路大震災は大きな災害を人々にもたらしたが、一面でボランティア活動の重要性を社会に再認識させる契機ともなった。つらく悲しい状況の中で、ボランティアたちの活躍はめざましいものがあり、とくに大学生や高校生など若い人たちのボランティア活動には、目を見張らせるものがあった。連日、ボランティアに関する報道がなされ、大震災はボランティアに対する関心と理解を一挙に広げた。

しかしながら、高校生のボランティア活動や高等学校におけるボランティア教育に関する実証的な研究はあまり見当たらず、それらをどのように推進すればよいかを各校とも模索しているのが現状であろう。

そこで、本研究では、次の点を中心に考察する。

- ① ボランティア活動をどうとらえ、ボランティア教育をどのように学校教育に位置付けるか。
  - ② 大震災に関連して高校生はどのようなボランティア活動を行ったか。その成果は何か。また、どのような問題点が見られたか。
  - ③ 高等学校における平常時のボランティア活動はどのように行われているか。また、その問題点は何か。
  - ④ 問題点克服のためにはどのような視点が必要か。また、具体的にどのような方策が考えられるか。
- これらの考察を通して、高等学校におけるボランティア教育の推進について研究を行うことにした。

## 1 ボランティア活動とその位置付け

### (1) ボランティア活動とは

ボランティア活動とは、一般的には「個人の自由意志に基づき、その技術や時間等を進んで提供し、他人や社会に貢献する活動」とされ、「自発性・無償性・公共性・継続性」<sup>1)</sup>の4原則があると言われる。

これまでボランティア活動といえば、一部の特定の人が行う社会福祉活動というイメージが強かった。しかし、ボランティア活動は特別な人だけが行うもので

ないことは、大震災を機に広く認知されたことであり、最近では、活動範囲についても、社会福祉、保健・医療、生活環境や地球環境の保全、国際交流、青少年の健全育成、スポーツ・文化活動等、生活全般に及んでいる。

### (2) ボランティア活動の意義とは

平成6年3月に青少年問題審議会が出した意見具申では、青少年期のボランティア活動が持つ教育的機能として、次の4点をあげている。

- ①自己の存在意義の確認、②豊かな人間性の育成、③主体的、創造的に活動する能力の育成、④国際貢献、環境問題等への関心の高揚。

このように、ボランティア活動は、家族や同年代の中で生活することの多い青少年の視野を広げ、自己の有用性を認識させ、自分の生き方や存在意義を見いだし、自己を確立していく上で貴重なものと言えよう。

また、青少年がボランティア活動に参加することは、「豊かさゆとりの時代」に向けてボランティアの層を広げていくことにつながるとともに、それによって社会の活性化に寄与することが期待されている。

### (3) 高等学校学習指導要領では

平成6年度から実施されている高等学校学習指導要領（以下、指導要領という）では、ボランティア活動・奉仕的な活動に関して次のような改訂がなされた。

- ・「家庭科」に「高齢者の生活と福祉」の項目が置かれ、社会福祉の意義や課題、ボランティア活動を通しての高齢者への理解等について指導することとなった。
- ・「特別活動」では、「クラブ活動」の中に「奉仕的な活動」が新たに加えられた。また、「学校行事」中の「勤労・生産的行事」が「勤労生産・奉仕的行事」と改められて、「社会奉仕の精神を養う」という文言が加わった。

このように、「豊かな心を持ち、たくましく生きる

人間の育成を図ること」(教育課程審議会答申)が改訂のねらうところであり、そのためには、奉仕的な活動等を通して他人を思いやる心や感謝の心、公共のために尽くす心を育てることが求められているのである。

#### (4) 本県では

兵庫県教育委員会『平成7年度指導の重点』では、福祉教育の基本的な考え方として、「そのねらいを明確にし、福祉に対する心情・理解・態度を身に付け、積極的に福祉実践のできる児童生徒の育成を目指すことが大切である」とし、「学校教育の全領域で」「生命の大切さや思いやりの心など福祉に対する心情を育み、体験を通して高齢者や障害者等への理解を深め、実践活動が日常的に行えるよう積極的に指導することが必要である」と述べている。

ボランティア活動等の体験を通して福祉に対する心情・理解を深め、実践力を身に付けるよう、学校教育の全領域を通じて積極的に指導していくことが必要とされているのである。

また、今回の指導要領の改訂に伴い、本県においても「兵庫県立高等学校教育課程基準の一部改訂について」という通達を出し、「その他特に必要な教科」として「福祉」を、「福祉に関する科目」として「ボランティア実践」を設けて、平成8年度から実施できるようにした。

## 2 調査の概要等

### (1) 調査A(当所が実施)

#### ① 調査対象

県立高等学校162校(全日制135、定時制25、通信制2。全定・全通併置校や分校については、それぞれに調査を依頼した)

回収率 90.7%

#### ② 調査方法

質問紙法(記述式)

#### ③ 調査時期

平成7年11月

#### ④ 調査内容

「高校生のボランティア活動についてのアンケート」  
・ボランティア活動やその支援に当たったの問題点  
・対応策や工夫

・評価できる点

・阪神・淡路大震災にかかわるボランティア活動の成果や教訓とすべき点

なお、生徒のボランティア活動に関する記録等があれば、併せて送付してもらおうよう依頼した。

### (2) 調査B(県教育委員会高校教育課が実施)

#### ① 調査対象

県立高等学校162校

(併置校や分校についても調査Aに同じ)

回収率100%

#### ② 調査方法

質問紙法(記述式、一部選択式)

#### ③ 調査時期

平成7年10月

#### ④ 調査内容

「平成7年度特別活動等における奉仕にかかわる体験的な活動の実施状況」

・内容、時期、参加単位等

・奉仕的な活動を行う部・クラブの有無、名称等

・阪神・淡路大震災にかかわる奉仕的な活動(ボランティア活動)

### 3 阪神・淡路大震災と高校生ボランティア

平成7年1月17日の大震災以降、阪神・淡路の地域では、大学生・高校生をはじめとするボランティアたちが活躍し、その活動は連日テレビや新聞・雑誌等で報道され、高い評価を受けた。

このとき、県下の高校生たちはどのような活動を展開したのか、この活動から得た成果や今後の課題は何か、についてこの章でまとめることにする。

#### (1) 県下の高等学校では

当所が行った調査Aの回答に併せて学校から送付された記録の中から、3校の活動を紹介する。

・県立神戸高塚高等学校(神戸地区)

同校では、「いきいきハイスクール創成事業」として福祉活動が推進されてきた。そして、平成6年11月に福祉同好会により機関紙「Welfare」が創刊された。ところが、2か月後に大震災が発

生。同会は1月24日には同紙特別号を発刊し、以後、連日のように交通事情・臨時時刻表・お風呂情報など生活関連の情報を発行し続け、教職員や生徒の期待に応えるとともに、ボランティア活動への協力を呼び掛けるなど、同校の活動の拠点として動いた。

・県立尼崎高等学校（阪神地区）

1月23日の授業再開直後から、自分たちのできるボランティア活動について学級で話し合い、多くの積極的な意見を集約して、次の二つのことに取り組むことを決めた。

・街頭募金

・被害の大きい地域でのボランティア活動

実施の前日には、昼休みに班長会議を開き、準備の段取りの確認、実施場所の調整、地図の配布を行うなど、自発的に行動することを始めた。

状況に合わせて班分けや活動内容を調整しながら、ボランティア活動はホームルーム活動の時間や休日を利用して2月末まで続いた。

・県立淡路農業高等学校（淡路地区）

2割近くの生徒の自宅が全半壊している状況の中、1月末には生徒会役員が中心となって呼び掛け、72名のボランティア委員が集まった。

昼休みや放課後を利用して折った千羽鶴3万羽を委員が編み上げてプレゼントし、併せて町内13か所の避難所周辺を掃除した。

さらに、同校で取り組めるボランティア活動を全校に調査し、その結果、各科の特徴を生かして

- ・同校で栽培した野菜や花、自作のクッキー配布
- ・老人ホームでの手伝い
- ・避難している子どもの遊び相手などを随時実施した。

これらの事例を見ると、このたびの震災にかかわる高校生たちのボランティア活動が高く評価されたのは、次のような要因によるものと思われる。

まず、学校が被災地にあると否とを問わず、多くの

高校生たちが「何かせすにはいられない気持ち」を持ち、それをさまざまな具体的な行動で示したことである。

次に、生徒会やボランティア部等が呼びかけを行い、活動を調整するなど素早い対応を示したことがあげられる。特にすぐれているのは、彼らが中心となって情報を収集し、活動内容や方法を定めるコーディネーター（調整役）としての役割を果たしたことである。

活動意欲を持った生徒たちと活動を調整する中核組織が存在し、人と組織とが互いにかみ合って、一つの目的に向かって行動できたことで大きな成果を生んだのであろう。

(2) 4月以降のボランティア活動

ここでは、調査Bの「阪神・淡路大震災にかかわる奉仕的な活動（ボランティア活動）について記入してください」に対する回答から、4月以降の活動について見ておきたい。

県下の高等学校では、被災地の学校を中心に、以下のように多様な活動が行われてきた。

ア 募金活動

- ・校内や街頭での募金活動
- ・文化祭バザー等の売上金を義援金として寄付

イ 環境美化活動

- ・避難所、仮設住宅の清掃活動
- ・仮設住宅のプランターへ花の移植

ウ 避難所、仮設住宅の手伝い

- ・救援物資の運搬や仕分け
- ・千羽鶴、絵画、プランター、踏み台等の寄贈
- ・老人のニーズ調査や介護補助
- ・仮設住宅の修理手伝いや引っ越し手伝い

エ イベントの実施や協力

- ・「励ます集い」等のイベント参加
- ・学校行事や地域のイベントに被災者招待
- ・コンサート等の開催

オ その他

- ・震災関連記録文集の作成、パネル展示
- ・建物被災調査の補助
- ・災害ボランティアを考えるネットワークづくり

(3) 震災におけるボランティア活動から学んだもの

① 調査Aに見る成果

当所が行った調査Aの質問(4)「大震災にかかわるボランティア活動を行う中で得た成果や今後の活動に教訓とすべき点があれば、記入してください」に対する回答で、活動の成果としてあげられているものは次のとおりである。

ア 社会の一員としての自覚

- ・人と人とのつながりの大切さを実感した。
- ・近隣との連帯感が生まれた。
- ・社会の一員としての自覚が高まった。

イ 有用感、充実感の体得

- ・期待に応えられたことで自信がいった。
- ・製作した物品が役立って、喜びを味わった。
- ・自校の生徒間の一体感が高まった。
- ・人間としての在り方を考えるようになった。

ウ ボランティア活動に対する意識変化

- ・参加することへの恥じらいや抵抗感が薄らいだ。
- ・活動の意義を知り、成就感を味わった。
- ・一人では参加しづらいが、クラス単位だと抵抗なく参加でき、積極的に取り組めた。
- ・気負うことなく活動にかかわっていった。

エ 貴重な体験

- ・物の豊かさに対する感謝の気持ちが生まれた。
- ・他人への思いやり等を体験的に実感した。

② 調査Aに見る課題

①と同じ調査Aの質問(4)で、教訓とすべき点としてあげられているものは次のとおりである。これらはそのままボランティア活動の持つ課題と捉えてよいものが多い。

ア 反省すべき点

- ・特定の個人に対する奉仕になった部分が多かった。
- ・被災地とのつながりが実感できない。
- ・個人的な活動に終わった感がある。

イ ボランティア教育の必要性

- ・適切な状況判断ができることが大切である。
- ・思いやりの精神を学ばせる必要がある。
- ・広い視野でボランティア精神を養う。
- ・ボランティアの基本姿勢を確立する。

ウ 学校に求められるもの

- ・日頃から活動できる態勢をとる必要がある。
- ・日頃から関係機関との連絡を密にしておく。
- ・生徒がどのような活動を行っているか把握する。

- ・学校教育におけるボランティア教育の在り方や教師の取組等について研修をする。

エ 生徒に対する配慮

- ・生徒たちの重荷にならないよう配慮する。
- ・お金の使途を報告する必要がある。
- ・支援活動を行う際、資金的な裏付けが必要である。
- ・義務的なボランティア活動にならないようにする。

オ 制度、運営システムの充実

- ・ボランティアを根付かせる制度が必要である。
- ・情報の適切な提供が必要である。
- ・リーダーの存在と協力者の支援が大切である。

調査Aから得られたこれらの課題については、次のボランティア活動に関する考察と併せて再論する。

## 4 高等学校におけるボランティア活動の現状と問題点

### (1) 高等学校におけるボランティア活動の現状

調査Bの「奉仕にかかわる体験的な活動の内容について記入してください」(選択式)に対する回答を集計すると、実施率は全日制高等学校で100% (135校)、定時制・通信制高等学校で81.5% (22校/27校)になる。

その内容と実施率は、次ページの図1のとおりである。なお、この活動は学校行事だけでなく、ホームルーム活動や生徒会活動、クラブ活動、部・同好会・有志の活動等を含んでいる。活動形態はさまざまであっても、図1に見られる実施率の高さが各校におけるボランティア活動の活発さを物語っている。

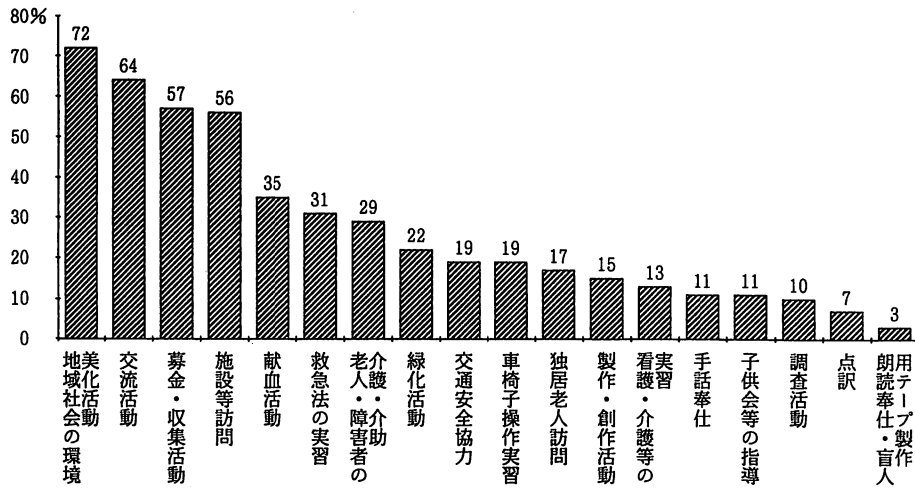
このうち最も実施率の高い「地域社会の環境美化活動」に、学校行事として積極的に取り組んでいる事例を次に紹介する。

・県立志知高等学校

約10年前から、1学期末考査後の1日を当て、校外一斉清掃奉仕作業を続けている。学校行事の一つに位置付けられたこの清掃活動には、全校生と教職員、PTA会員だけでなく、地域の住民や保健衛生連合会の人々も参加している。作業前日には全校集会をもち、清掃奉仕作業の意義を説明するとともに細かい注意も行う。

当日は三原郡を中心とする地元の公園や河川、

図1 奉仕にかかわる体験的な活動の内容と実施率



海岸など8か所に分かれ、熱心な清掃活動を行って、地域住民から高い評価を受けている。

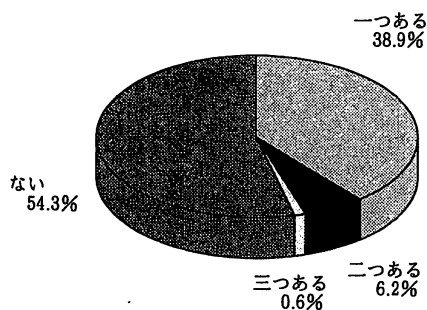
(2) ボランティア部等の活動の現状

県下の高等学校には、どのようなボランティア部やクラブ等があり、また、どのような活動を行っているかを見ていくことにする。

① ボランティア部・クラブの設置状況

調査Bの「奉仕的な活動を行う部またはクラブがあれば、記入してください」に対する回答を集約したものは、図2のとおりである。

図2 ボランティア部等の設置率



奉仕的な活動を行う部またはクラブ（以下、ボランティア部等という）は、県下162校のうち45.7%（74校）に設置されており、全日制高等学校135校に限れば、設置率は、54.1%（73校）である。

ボランティア部等があると回答した74校のうち、一つの部等をあげたのが63校、二つあげたのが10校、三つあげたのが1校である。

また、回答された86部等のうち、ボランティア活動

を主な目的とする部等（ボランティア部、福祉活動委員会、JRC等）は66、それに対して、ボランティア活動を本来の目的としない部等は20であった。

後者は、家庭部・学校家庭クラブ、吹奏楽部、演劇部、華道部、放送部、園芸部、野外活動部等である。このような部が、自分たちの本来の活動だけでなく、ボランティア活動をも活動の一つに入れていることは注目されよう。

② ボランティア部等の活動状況

次に、これらの部等ではどのような活動が行なわれているかを見てみる。

調査Bの「奉仕にかかわる体験的な活動の内容について、記入してください」に対する回答から、クラブ活動・部・同好会の項を集約すると、これらの部等は以下のような活動を行っていることが分かる。

ア 施設訪問・交流活動

- ・老人ホームとの交流
- ・共同作業所訪問
- ・養護学校とのふれあい活動

イ 地域活動

- ・子供会のイベント協力
- ・キャンプやサマースクールでの指導
- ・スポーツ大会での運営補助
- ・独居老人宅への弁当配達

ウ 学校招待活動

- ・体育祭や文化祭への招待

エ 行事参加活動

- ・しあわせの村まつり等への参加

オ 飼育栽培活動

- ・菊、サルビア、葉ボタン等花の植栽
- カ 収集募金活動
  - ・街頭募金
  - ・古切手、書き損じハガキ等の回収
- キ 清掃美化活動
  - ・通学路、無人駅等の清掃
  - ・淡路島全島清掃活動への参加
  - ・空き缶、牛乳パックの回収
- ク 理解促進活動
  - ・手話、点字実習
  - ・車椅子、アイマスク体験実習
  - ・ワークキャンプ参加
  - ・福祉に関するテキスト作成、編集
- ケ その他
  - ・障害者介助
  - ・交通安全マスコットなどの製作、配布
  - ・献血

など、多岐にわたって継続的な活動を行っている。

次に、ボランティア活動を主な目的とする部とそうでない部の活動について、それぞれ紹介する。

- ・県立鈴蘭台高等学校（福祉活動委員会の訪問交流活動）

同委員会には3学年合わせて33名おり、年間を通じて老人ホームだけでなく共同作業所や児童館への訪問・交流活動を活発に続けている。

老人ホーム「鈴蘭荘」には従来のお掃除ボランティアに加え、手話で歌おうと「手話ソング」を月2回お年寄りと一緒に学び合って親睦を図っている。

また、障害者授産施設「みのたに園」の大掃除や共同作業、夏祭り、クリスマス会などにも参加し、交流を続けている。

- ・県立山崎高等学校（野外活動部の地域活動）

同部は、ふだんはキャンプやオリエンテーリング等を中心にした活動を行っている。同時に、自分たちの技術と経験を生かして、地元の子供会や中学校がキャンプを実施する場合の指導・援助も行っている。

27名の部員たちは、テント張りや食事の手伝い、

ゲームの進行、歌唱指導、話し合いの指導等を行う。今ではその活動は、県のサマースクールでの指導や施設のクリスマス会の手伝い等、西播磨全域に広がり、年間を通したものになっている。

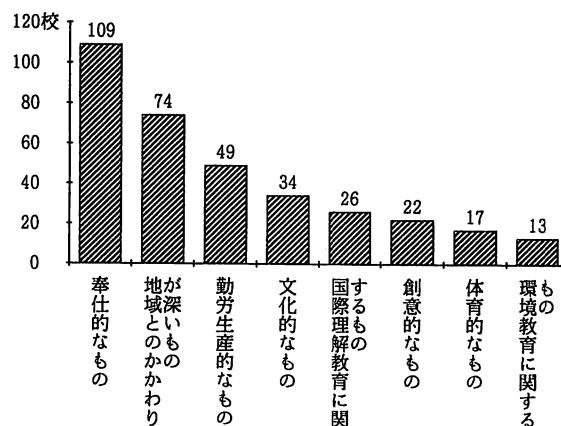
このように、ボランティア部だけでなく他の部もボランティア活動を行い、さらには「いきいきハイスクール推進事業」等で活動している学校も多い。

### (3) 「いきいきハイスクール推進事業」による活動

各高等学校が、独自の発想で特色ある教育実践に意欲的に取り組むことにより、いきいきとした活力ある学校づくりを推進するため、平成4年度から「いきいきハイスクール創成事業」がスタートした。平成7年度からは、その成果を継承発展させるために、同推進事業が始まっている。

その実施内容をまとめたものが、図3である。

図3 「いきいきハイスクール推進事業」の実施内容



奉仕的な内容のものが最も多く、しかも前年の92校から109校に増えた。そして、地域とのかかわりが深いものが次いでいる。また、震災にかかわる内容を取り入れた学校が22校あるのも平成7年度の特徴である。

奉仕的な事業の事例のいくつかを、副題と概要を併せて次ページの表にまとめた。

このように、「いきいきハイスクール推進事業」の実施状況から、ボランティア部等がない学校においても、学校の教育活動としてボランティア活動が行われていることを伺い知ることができる。

### (4) ボランティア活動推進上の諸問題

ここで、調査Aの質問(1)「貴校では、生徒のボラ

表 「いきいきハイスクール推進事業」の事例

学 校 名	副 題	事 業 の 概 要
県立尼崎工業高等学校	豊かな環境づくりと地域と共に生きる学校づくり	アルミ缶の回収とリサイクル作品の製作・展示。校内花植え運動。震災関連ボランティア活動。小学生水泳・工作教室。
県立篠山産業高等学校	地域と心をつなぐ活動	花栽培と公共施設での展示。フラワースタンド製作。独居老人宅訪問・修理。福祉施設訪問。公共施設清掃。
県立吉川高等学校	地域ボランティア活動で共生の住みよい社会へ貢献	学校周辺施設や通学路の環境美化。福祉講演会。手話講座。学校行事に高齢者を招待。マスコット配布。
県立西脇北高等学校	豊かなこころを育む福祉活動の推進	福祉講演会。登下校路クリーン作戦。空き缶回収。福祉施設訪問と奉仕活動。
県立姫路飾西高等学校	いきいきボランティア	福祉施設訪問・招待。手話。車椅子・盲人介護講習会。インドシナ難民との交流。地域の清掃。水質調査等。

老人ホームでのふれあい（県立篠山産業高等学校）



ンティア活動（奉仕にかかわる体験的な活動）やその支援に当たって、どのような問題点がありますか」に対する回答から、推進上の諸問題をあげてみる。なお、項目末尾の数字は回答校数を表す。

① 生徒にかかわる問題点

- ・勉強や部活動等で忙しく、時間確保が難しい。 40
- ・一部生徒の活動にとどまり広がり欠ける。 22
- ・学校主導で自発性に欠ける。 13
- ・生徒が理解不足、意欲不足である。 10
- ・きっかけがなく、どうしてよいかわからない。 4
- ・活動に継続性がない。 3
- ・部員の確保が困難である。 3
- ・リーダーが不足している。 3
- ・個人でやるより団体で行うことを好む。 3
- ・生徒が少人数で部・同好会もない。 1
- ・間接的な奉仕活動の段階にとどまっている。 1

② 学校・教職員にかかわる問題点

- ・教職員の勤務時間外になることがある。 10
- ・教職員の意思統一が困難である。 9
- ・平日の個人参加をどうするか。 5
- ・教育活動への位置付けが難しい。 4
- ・生徒の個人的な活動が把握できない。 4
- ・体制づくりができていない。 3
- ・大規模校なので学校全体では動きにくい。 3
- ・校内の活動場所がない。 3
- ・学校の役割、指導の在り方が難しい。 3
- ・啓発指導のための時間がない。 3
- ・道具等の不足。保管場所がない。 2
- ・適切な指導者がいない。 2
- ・研修会の講師、講師料、資料が不足している。 2
- ・教職員の旅費や災害保障に問題がある。 1
- ・どう指導してよいか分からない。 1

③ 外部団体、情報収集にかかわる問題点

- ・施設との日程等の調整が難しい。 8
- ・情報が断片的にしか入ってこない。 7
- ・外部団体と意識のずれがある。 5
- ・参加希望者が多すぎて、調整が困難である。 2
- ・近隣施設はすでに多数の交流校で手いっぱい。 1
- ・施設等とのパイプがない。 1

④ 実際に活動していくなかでの問題点

- ・交通費、材料費等の経費が不足している。 35
- ・事故が起こった場合の対処法、責任が難しい。 14
- ・交通手段（移動中、活動中）の確保が難しい。 7
- ・メニューがマンネリ化してくる。 3

・義務感から活動している。

1

## 5 問題点克服のための提言

### (1) 克服のための視点

高等学校でボランティア活動を推進していくには多くの問題点があるが、一つの課題に対して多様な解決策を探ったり、学習者の実態に応じて幾通りものメニューを用意したりするなど、多面的な解決策を工夫するという対応が必要であろう。その前提として、問題点克服のための視点を三つ考えたい。

#### ① 活動の原則を柔軟に考える

生徒が参加する場合、「自発性・無償性・公共性・継続性」の原則については柔軟に考える必要がある。

従来のボランティア活動では、これら4原則が考えられてきたが、現在では無償性にこだわらない活動、また、継続できなくても自分ができるときに行う活動でもよいと変化してきている。

たとえば、さわやか福祉推進センター所長の堀田氏は、「それぞれの個性を生かして、好きなようにやってもらうのがボランティアの基本ですから、型にはめる気は毛頭ありません」<sup>2)</sup>と述べ、無償性についても、一部報酬をもらってさしつかえないとの柔軟な考えを示している。身近なことから、できることからまず始めるのがボランティアの要点である。

#### ② 信頼関係の上に成り立つとの認識を持つ

ボランティア活動は元来自発的な活動であるために、時には活動する人の「してあげる」という気持ちが先行し、善意の押しつけになることがある。しかし、この活動は、「してあげる側からしてもらう側へ」という一方向の関係ではなく、双方の信頼関係の上に成り立っており、この認識が双方にあって始めて成果が生まれるものである。

活動する側の一方的な考えで行ったことが相手の反発を招いたり自立を妨げたりしないような配慮が、学校教育では特に求められよう。

#### ③ ボランティア教育を取り入れる

ボランティア活動そのものが教育的な機能を持つことはすでに述べたが、ここでは、ボランティア教育を取り入れる視点を提案する。

文部省は、「学習指導要領では、社会奉仕の精神を涵養し、公共の福祉と社会の発展に尽くそうとする態

度を育成することを重視し、例えば特別活動で奉仕的な活動を明示するなど、内容の一層の充実を図り、小・中・高校生がボランティアについて体験することになっている」<sup>3)</sup>として、ボランティア教育を推進しようとしている。

生徒の活動において、自発性や継続性の点で厳密な意味のボランティア活動と言えない場合が時にある。しかし、豊かな心は豊かな体験を通して育てられるものであり、勤労や奉仕にかかわる体験的な学習と奉仕の精神の涵養を中心とするボランティア教育を積極的に推進することが大切である。

### (2) 問題点克服のための提言

ここでは、調査Aの質問(2)「問題点に対する対応策や工夫があれば、具体的に記入してください」に対する回答を参考にしながら、以下に諸々の問題点への対応策を提言する。

#### ① 教育活動に位置付ける

ボランティア教育を、各校で教育活動に位置付けることが必要である。

何らかの契機がなければ、高校生が自発的にボランティア活動を行うことは少ない。より多くの高校生たちにボランティア活動の意義や内容について理解させるためには、学校教育の中で、意図的に活動の機会を用意する必要がある。本来は自発的であるべき活動が、生徒にとって受動的になる一面はあっても、活動へのオリエンテーションと位置付けて積極的に取り組むべきである。

このように学校教育の一環として活動を体験することにより、ボランティアに対する理解や心情が育ち、生徒が自らの意志で実践へ踏み出すようになれば、本県の教育目標である「明日を担うこころ豊かな人づくり」への有効な一歩となり得よう。

さて、学校の教育活動に位置付けるには、次のように行うのが適切であろう。

#### ア 教科で行う

まず、教科の中で取り扱うべきである。

調査Aの各校からの回答には実践がいくつか見える。

・「公民科の『現代社会』で、ボランティア精神や社会福祉について学んだり、手話・点字を実習したりしている。そのうちかなりの生徒がボランティア活



動に参加している」

- ・「有志参加の形で、家庭科課外特別実習として市内の特別養護老人ホームを訪問し、大掃除の奉仕活動をした。7年度はボランティア活動を教科の夏季課題とした」

また、本県では、平成8年度から新設教科「福祉」の中に科目「ボランティア実践」を設置できるよう高等学校教育課程基準の一部を改訂した。

「ボランティア実践」の目標は、「ボランティア活動に関する基礎的な知識・技術を習得させるとともに、実践をとおしてボランティアに対する理解や自覚を高め、よき社会人として自己を高めようとする意欲と態度を養う」とされ、同基準では内容を「(1)ボランティア活動の基礎 (2)ボランティア活動の実際」に分けて示している。

#### イ 特別活動で行う

次に、特別活動であるホームルーム活動、生徒会活動、クラブ活動、学校行事でもボランティアの啓発指導や体験的な学習を積極的に推進すべきである。

前述のように「いきいきハイスクール推進事業」として実施している学校も多く、全校的な取組として行くと教職員間の共通理解も得やすい上に、生徒も参加しやすい。

このようにボランティア教育を教育活動に位置付け、それにかかわる教科や特別活動を教育計画に盛り込むことによって、次のような効果が期待できる。

#### 【期待される効果】

- ・生徒のボランティア意識の高揚
- ・自主性、自発性の育成
- ・活動場所や時間、経費の確保
- ・安全確保、事故への対応
- ・教職員の勤務時間への対応
- ・教職員間の共通理解

#### ② 学習の成果を生かす

教科の学習を通して得た技術や資格を生かしたり、実習等で製作した作品を寄贈したりすることで、ボランティア活動を行うこともよい方法である。

このような活動を、全日制高等学校はもちろん、時間的制約の厳しい定時制高等学校でも、作品製作等を通じて行っている学校がある。

- ・『「いきいきハイスクール推進事業」の一環として、

地元の児童・生徒と保護者を対象に、食品加工科の生徒が『自分で作ってみる加工体験』という公開講座を開いている。醤油の仕込みといちごジャムの製造から始まり、菓子パンとクッキー、和菓子、白みそ、漬け物、ケーキ、最後は醤油の瓶詰めまで、加工体験を楽しんでいる」(県立氷上高等学校)

- ・「4年前から毎年リハビリセンターへの支援活動を行っている。入所者から必要なものを聞いて、生徒が製作する。平成7年度はキャスター付きの布団・手ぬぐい干し機7台を作って寄贈した」(県立白鷺工業高等学校)
- ・「取得した電気工事士の資格を生かして独居老人宅のタコ足配線防止工事を実施したり、空き缶プレス機の製作を行ったりするなど、学習の成果をボランティア活動に生かす試みをしている」(県立豊岡実業高等学校)

#### 【期待される効果】

- ・自らの学習が役に立つという成就感の体得
- ・生徒のアイデアの活用
- ・生徒の社会的視野の拡大
- ・メニューのマンネリ化の打開
- ・多くの生徒の参加と多様な活動の展開
- ・開かれた学校づくりの推進
- ・指導を通して教職員の意識の高揚
- ・教職員の勤務時間への対応

#### ③ ボランティア部等を設置する

学校に、ボランティア活動を行う部(クラブ・同好会・委員会)等を設置することの意義は大きい。

県立神戸高塚高等学校の事例で見たとおり、ボランティア部等があった学校では、大震災時の対応が素早く、さまざまな情報を流して一般生徒の「何かしたい」との思いを具体的な活動に組織していった。

平常時の活動では、調査Aの質問(3)「生徒たちがボランティア活動を行う中で、評価できる点があれば、具体的に記入してください」に対する回答で、次のように記されている。

- ・「ボランティア部に刺激されて参加する生徒の輪が広がっている」
- ・「社会的視野の広いリーダーが育ってきた」
- ・「部の活動に対する社会的評価が高まっている」
- ・「ボランティア活動に関するさまざまな情報を1か

所に集約できる」

また、ボランティア部等が設置できない場合は、他の部がそうした活動を行うことも積極的に考えるべきである。学校家庭クラブや家庭部・吹奏楽部・園芸部・野外活動部等がボランティア活動を行っている学校や、運動部で地域のスポーツ大会の審判や運営の補助を務めたり、清掃活動等を継続して行ったりしている学校もある。

工夫すれば、部の本来の目的に向かって活動しながらボランティア活動を行うことは十分に可能である。それは、部本来の活動を妨げるものではなく、むしろ部の活動を活性化させる。自分たちの活動が社会に役立つとなれば、二重の励みになるであろう。

#### 【期待される効果】

- ・意欲ある生徒の組織化
- ・活動の核、リーダーの育成
- ・他の生徒たちへの波及効果
- ・活動場所や時間、経費の確保
- ・安全確保、事故対応
- ・地域連携の窓口一本化
- ・教職員の勤務時間への対応
- ・社会的評価の定着

#### ④ 地域・関係機関との連携を図る

市町や社会福祉協議会、PTA等の協力を得たり、地域の各施設との連携を図ったりするのは、ボランティア教育の推進に欠かせないことである。

また、市町の福祉協力校に指定されたり、県の福祉体験活動推進校の指定を受けたりすることは、市町との連携や教職員の意識の高揚等にプラスになる。

- ・「老人ホーム訪問に、町役場のバスを利用させてもらい、交通費をカバーしている」
- ・「今年度は点字翻訳のボランティアを勧める計画である。機器が不足しているので、市の社会福祉協議会から援助をいただいた」等の事例がある。

ただ、各機関や施設に対しては、こちらの都合優先で臨むと迷惑をかけることにもなりかねない。ともに地域の一員であるとの認識を持ち、連携を密にとりたいものである。

#### 【期待される効果】

- ・直接体験による意欲の喚起
- ・学校では得にくい知識・技術の習得

- ・交通費・交通手段等の負担軽減
- ・密接な連携による活動の持続
- ・メニューのマンネリ化を防ぐ多様な活動の実施
- ・器具や設備等の確保
- ・情報の入手が容易
- ・施設側との意識のずれの防止
- ・日程や人数等のスムーズな調整
- ・専門家、指導者の確保
- ・教職員の意識高揚

#### ⑤ 活動のノウハウを共有する

##### ア 活動目標や対象を明確化する

活動を活発に行うためには、「誰に対して、何をするか」という活動目標や対象を明確にすることが効果的である。

大震災の救援活動では、どこのどういう人たちに何を送るか、どのような人的援助をするかを明確にした場合に、ボランティア活動は盛り上がりを見せた。目標や対象、手段が具体的であればあるほど生徒は対応しやすくなる。

平常時の募金活動にしても、何かに役立てるためという漠然とした目的よりも、どこのどういう人たちに何を送るための募金か、を明らかにすることが大切である。

#### 【期待される効果】

- ・社会的視野の拡大
- ・活動への参画意欲の高揚
- ・多様なボランティア活動の展開
- ・生徒のアイデアの活用
- ・義務感からの解放

##### イ できることから気軽に

ボランティア活動を特別のことと考えずに、身の回りにある小さなことから気軽に始める姿勢が必要である。ボランティア活動は多種多様で、身近なところにその活動の機会と場があり、いろいろな場面で参加することができる。自分のまわりで今、何が求められているか、自分には何ができるか、を考えることからボランティア活動が始まる。

時には教師が呼び掛けたり、アドバイスをすることも必要であろう。その際、教師もボランティア活動を型にはめないで、上に述べたような姿勢を持つことが大切である。

- ・「福祉活動を身障者施設・老人センターに限定していたが、学校周辺の児童館・保育所などにも声をかけ、こうした方面の活動にも幅を広げた」

との報告もある。活動範囲や対象を広げて成功した例である。

#### 【期待される効果】

- ・充実感、有用感の体得
- ・ボランティア活動の意義の体験的理解
- ・問題点発見の過程を通しての主体性や意欲の育成
- ・ボランティアの層の拡大
- ・活動分野の拡大
- ・地域の学校理解、生徒たちの地域理解の進展

#### ウ 自覚に基づく役割分担を行う

大震災では、被災地で救援活動を行ったり、遠隔地で義援金や必要物資を提供したりなど、さまざまな活動が行われた。ボランティア活動は自分のできることをできる範囲で行うものだと考えれば、高校生の場合も、自分のできる役割を可能な範囲で果たすという考えを持ってよい。

例えば時間や距離の関係で活動に参加できない者は、募金をしたり活動費の援助を行ったりしてそれに代えることもできよう。

#### 【期待される効果】

- ・活動への参加意識
- ・参加生徒の層の拡大
- ・活動の可能性拡大

#### エ 経費と時間について工夫する

経費と時間の問題について対応策を考えてみる。

まず、経費の不足を問題点としてあげた学校が最も多かった。これについて次のような方策を考えることができる。

- (ア) ボランティア支援基金を創設する。
- (イ) 生徒会費などから一部負担する。
- (ウ) 必要経費の内訳を事前に示して了解を得、自己負担させる。
- (エ) 経費のかからない活動を考える。

(ア)には「ボランティア支援基金のようなものを、学校や地域社会でつくりたいか」という回答があった。文化祭のバザー収益を積み立てたりPTAや広く地域に呼びかけたりして、基金をつくることも考えられる。

また、(エ)については、不要になったものを活用して

プレゼントを製作したり、近隣の施設で活動したり、関係機関のバスを借りて交通費を軽減したりなどの工夫ができよう。

次に、「時間がない」も経費とともに多かった問題点である。とくに定時制や通信制の高等学校では深刻である。全日制の高等学校でも勉強や部活動との両立が難しいとの声がある。

これに対しては次の方策が考えられよう。

- (ア) ボランティア活動を学校行事やホームルーム活動の年間計画に組み込み、あらかじめ時間を確保する。
- (イ) ボランティア活動を行うクラブをつくる。
- (ウ) 「課題研究」などでの学習の成果を生かす。
- (エ) 部活動引退後や進路決定後の3年生に参加を促す。

(ア)の工夫では、第1・3土曜日に「ボランティア日(あるいは時間)」を設定して学校行事として取り組む。また、(ウ)では、金属加工の実習で製作した焼却炉を施設に寄贈する等が好例であろう。

一年間フルにボランティア活動に参加しなければならないのであれば、生徒にとっても負担が大きいときもある。できる範囲の中で、生徒各人の力量に合わせて活動するところから始めたいものである。

#### おわりに

阪神・淡路大震災には、国の内外から延べ130万人を越すボランティアが駆けつけ、被災者の救援活動や支援活動に当たるなど、多種多様な活動を展開した。その活動の特徴は次の3点にまとめることができよう。

- ① 従来のボランティア活動は主に社会福祉に向けられていたが、今回は災害に立ち向かうという、これまでにない活動内容となったこと。
- ② ボランティアの総数が130万人を越すという、かつてない大規模なものになったこと。
- ③ 従来のボランティアは中高年の女性が主力であったが、今回は10代20代の若い人たち、大学生や高校生、中学生たちもボランティアとして加わり、しかも男性の割合が比較的高かったこと。

また、本県福祉部の「ボランティア活動に関する調査結果」によると、今回のボランティアの約70%はこれまで活動経験はなかったが、今後とも活動を継続したいという人は75%に達している。このことから考えれば、この大震災を機に、日本でボランティア活動が

定着する気運は確実に高まりつつある。

平成7年10月に、本県の防災教育検討委員会は、「兵庫の教育の復興に向けて」という提言の中で「ボランティア教育の推進」を謳い、「今後は、学校においてもボランティアの理念等についての学習機会の充実に努めるとともに、国籍を越えて『共に生きる』社会づくりに向けた実践的活動が日常的に行えるよう、学校におけるボランティア教育の一層の推進を図ることが大切である」とまとめた。

ただ、ボランティア教育はまだ緒についたばかりの段階であり、すでに見てきたとおり問題点は多い。今後は、さまざまな条件整備だけでなく、理論面・実践面での整備も行わなければならない。

それに関連して述べると、生涯学習とボランティア活動との関係について、生涯学習審議会の第一次答申(平成4年7月)は、「ボランティア活動自体が自己開発、自己実現につながる学習活動となる」「ボランティア活動を行うために必要な知識・技術を習得するために生涯にわたる多様な学習活動があり、その学習成果を生かし、深める実践としてボランティア活動がある」との視点を示した。

それを受けて、本県教育委員会も平成5年度から「生涯学習ボランティア活動総合推進事業」を始め、生涯学習ボランティアセンターやボランティアバンクを開設した。同バンクの活動方針の一つに、「高校生への生涯学習ボランティア活動参加への動機づけ」があげられている。

今後、さまざまな機会を通して活動への誘いが展開されるであろうが、ボランティア活動は生涯にわたって自らを高める学習の一環であり、一人ひとりの生徒の生きる力を育む上で重要な教育活動であるという認識のもと、高等学校でもその入り口としてのボランティア教育を推進すべきである。

最後に、本研究のための調査に際し、ご協力いただいた各高等学校に厚くお礼を申し上げます。

### 引用文献

- 1) 兵庫県社会福祉協議会『ボランティア手帳』1994
- 2) 毎日新聞社『はじめてのボランティア』1995
- 3) 文部省『教育委員会月報』平成7年3月号 1995

### 参考文献

- ・青少年問題審議会「『豊かさゆとりの時代』に向けての青少年育成の基本的方向—青少年期のボランティア活動の促進に向けて(意見具申)」1994
- ・文部省『高等学校学習指導要領』1989
- ・兵庫県教育委員会『平成7年度指導の重点』1995
- ・兵庫県教育委員会「平成7年度いきいきハイスクール推進事業について」1995
- ・兵庫県福祉部「阪神・淡路大震災におけるボランティア活動に関する調査結果」1995
- ・防災教育検討委員会「兵庫の教育の復興に向けて」1995
- ・兵庫県立教育研修所『研究紀要第106集』1995
- ・総務庁青少年対策本部『青少年とボランティア活動』1994

### 調査A

「高校生のボランティア活動についてのアンケート」  
質問内容

- (1) 貴校では、生徒のボランティア活動(奉仕にかかわる体験的な活動)やその支援に当たって、どのような問題点がありますか。お気づきの点を具体的に記入してください。
- (2) 上記の問題点に対する対応策や工夫があれば、具体的に記入してください。
- (3) 生徒たちがボランティア活動を行う中で、評価できる点(例:自主性の確立、社会的な視野の広がり等)があれば、具体的に記入してください。
- (4) 生徒たちが阪神・淡路大震災にかかわるボランティア活動を行う中で得た成果や今後の活動に教訓とすべき点等があれば、具体的に記入してください。

※御協力ありがとうございました。なお、生徒のボランティア活動の記録(一年の歩み、学校新聞、一般新聞、部活動報告等)があれば、研究の参考にさせていただきますので、御送付ください。

### 共同研究者

延藤十九雄	橋本 光政	土井 正
石山 稔	濱田 正晴	宮本 俊郎
吉田 和志	清重 安男	藤井 義一
江本 博明		